

最優秀賞

夏の夜空に輝くもの

青森県 弘前中央高等学校一年 五十嵐 愛乃

夏の夜空に武者絵が舞う。その迫力と色彩豊かな色、ライトを通すことにより光り輝くロウ、絵師の魂が宿った扇形のねぶたを見ると皆が心奪われる。今年の夏も見送り絵と共に過ぎ去って行った。遠ざかるねぶた囃子の音色を聴きながら今年の夏を振り返る……。

毎年六月下旬からねぶた祭りにかけて、ばかり空いた父の布団。明かりがこぼれる父の作業場。父は、毎年弘前で行われる「ねぶた祭り」に出陣する扇ねぶたを描いて今年で十二年。し

かし、今年の夏はいつもと違うのである。

父は今年の春、長年勤務していた職場を離れた。新たな職に就いた。まだ職について間もない父は忙しくて、なかなかねぶたに手をつけることができないでいた。数年前から私も色塗りなどの簡単な作業は手伝っていたが、今年はもっと力になりたいと思い、父に申し出たところ一つの仕事を与えられた。それは見送り絵や前ねぶたなどに字を書くことであった。私は小学一年の頃から書道を習っていたが、ねぶたに字を書く普通には過したとだけしか楽しかった。と、何度も思った。この時はまだ、父の行動を理解できずにいたのも事実である。

普通に字を書いて、その上をロウでなぞるという単純な作業なので楽勝だと、書く前は思っていた。しかし、この作業だけでも結構な時間がかかったとともに疲労を感じたのだ。四十過ぎの父はこの作業の何倍もの作業をしていると思うと気が遠くなった。今年の父はいつも以上に忙しかったことは言うまでもない。そして、その不安定な体調のまま作業場に戻るのだから、どうして父はこんなに苦労してまで、ねぶたを描くのだろうか。ねぶたを描かないで、こ

父のねぶた絵は、紙貼りの日ぎりぎりに完成した。骨組みに絵が貼られた時、私は自分の書いた字の出来が気になり早足で見に行った。ライトを浴びて、ロウが光を通してまるで魂が宿ったように字が生き生きしていた。私の字はまだまだ未熟であるが、自分で書いた字に感動した。しかし、父の顔にはまだ笑顔はなかった。来年、私の住んでいる岩木町は合併して弘前市になるそうだ。岩木町として最後の出陣となるので、特別なことをしようと、弘前城と三味線奏者が乗る台車を作ることにしたのだ。これら

はねぶた出陣の前日にできあがり、ようやく父の表情も明るくなったような気がした。

ねぶた祭り当日。雨で心配されていた運行であつたが予定通り出陣して夜空を焦がした。三味線奏者でもある父は、一番先頭を走る台車に乗って仲間達と三味線を弾き、私は一番後ろを走る太鼓の後でねぶた囃子の笛を吹いていた。いつもは気にならないが、今年は自分もねぶたに携わつたせいかな絵を見た人の反応が気になつた。辺りを見回して我が目を疑つた。カメラのシャッターの光、歓声と拍手の嵐、中には父のねぶたを見て涙を流す人もいたので私は言葉を失つた。この時、初めて父が苦勞しながらも毎年ねぶたを描く理由がわかつた気がした。

た。父は、来年も再来年の夏も「ヤヤードー」の掛け声とともに感動を与え、周りの皆から感動をもらつたことだろつ。今、ぼつかり空いていた布団で父がぐっすり眠っている。作業場の明かりもない。忙しい夏は静かに幕を閉じた。

父は、ねぶた絵師だけではなく三味線奏者でもある。たまにボランティアで老人ホームなどに三味線を聴かせに行く。時には県外にも出かけるので、私も含め家族皆が少し呆れていた。でも、今の私には父の気持ちができる気がする。三味線を聴かせることにより、ねぶたの時と同じ現象が起こるのなら、確実にわかるはずである。今年の夏、私は少し成長した気がする。今年の夏に得た感動は、お金に換えられない価値があると私は思う。父が苦勞した分それが観客の歓声や涙となって返ってきたのではないだろうか。苦勞した自分自分に大きな感動となつて返ってくる。共に相手にも感動を与えることができる。今年の夏、私は貴重な体験をし

